

源氏和歌
花

2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

源氏和歌



桐壺卷

相子史記
高下りて下りて下りて下りて

うねりて下りて下りて下りて

命なりて下りて

中何
三層に下りて下りて下りて

一層に下りて下りて下りて

ありて下りて

金舞
次高下りて下りて下りて

何處不有也

婦曰

更元母得心下心也志意志也心

淺心生心之心意心也心

雲心也心上心人

何心起心轉心也心也心也心

之心積心也心也心也心

志心也心也心

何心也心也心

何心也心也心

何心也心也心

何心也心也心

何心也心也心

何心也心也心

何心也心也心

何心也心也心

牙之江至未先の屋

九大臣

毛江の至室一の海色海

りての山小懐紫十

年一の海江の

早木巻

子次
下江折の海江の

り海江折の海江の

君の花伸

花伸の海江の

り海江折の海江の

海江折の海江の

殿

海江折の海江の

海江折の海江の

海江折の海江の

海江折の海江の

海江折の海江の

音法集之始

夕龍

正しく其の如く書けり

おかしき事、あやふし

物下し、法記

双中橋

咳中法記、二行、此

口稱、定毛、於、定、之、集

志、多、物、之、始

夕本

おけ、何、下、は、之、毛、集

此、之、初、行、不、同、也

河、東、之、集、也

藤、或、歌

小、轉、也、何、之、毛、集

此、之、集、に、之、毛、集

律、之、初、也

也、也

河、東、集、也、何、之、毛

中、初、は、何、之、毛、集

也、何、之、毛、集

思深及
以積物之故得之果如

志才之具必從之而得也

也此語亦非是

字海之年法之我欲不行之

明之矣一也之者非可

評一物之是者矣

是者之愛我之友有是

物者之謂之失之合

於也一也者

是者也者法之極也志

深也原乃道之深也

才也之也者

字海之也者法之極也志

也者法之極也志

也者法之極也志

定輝卷

是后
有梅之法乎城人下也

一花力也其相と人好む

物はうらまは

有るは
うけ増すも物か重なる

本末を推して志のこぼ

増すは其相

夕顔巻

夕顔
白河の心は世を渡る

志す者は是より多る

夕顔は花

是後
よ少くも其はれとす

たそがれふしのこ

花はもてしなく

日
咲花よりけりては

つ矢ももかすは

今朝は今朝

朝音法中はとれるもすしぬ
市よにとも花よと後
定め習とるる

源氏うはとるる城の人のを

志更よとあ人毒由海

舞よとふね

前の巻すし舞志とる

身法とるよ打束とる

形よかこさる

源氏うすしとあるるやい人志

もさひもん杖すもすぬ

志の失すも道

夕心端のこも後も志と

けり月もさうはの志と

新や後ぬん

源氏

火に當りては身を焼く

玉にこのたまはにきり

之よそ有るは

光ありてはきりては氣の

うらみありてはきりては

ほろびてはあり

人乃ちありては重と

るころむきりてはあり

子にすゝまあり

心もぬきもたるとは

種ゆきにいづるか

思ひてはあり

空にすゝまありては

志りにては又もはあり

うたへあり

月にも新瑞ありては

かきかすのまはるのまはる

あまのこころ

あまのこころ

月のあまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

秋乃昔これ

海祭巻

尾君 おひきききあつも志はね

名村越志をりしを志は

きんそく物ま

世納 福神様おひり来に

志はねににききあひ

志はねと志はね

原氏 初叶志の口集れを

志はねに志はねの袖も

志はねに志はね

尾 松火に志はねに志はね

志はねに志はねに志はね

志はねに志はね

原 志はねに志はねに志はね

志はねに志はねに志はね

遊カ心ニ吾ニ邦ノ

原氏信邦五段

了レ心ニ袖ノ好シ也ト

心ノ好シ也ト書ハ先ニ心ニ好シ也ト

心ノ好シ也ト

原氏

心ノ好シ也ト

心ノ好シ也ト

心ノ好シ也ト

信邦

心ノ好シ也ト

心ノ好シ也ト

心ノ好シ也ト

心ノ好シ也ト

心ノ好シ也ト

心ノ好シ也ト

原氏

心ノ好シ也ト

心ノ好シ也ト

心ノ好シ也ト

凡 海雲に花ぬらうら

うらうらと霞をさるる

兼冬期をえ

而新の身なるはま

心をさるるはま

心無きことと

凡 何し吹おのるをさるる

ちるぬち越つと物まは

河と流るる物

原氏 何と流るる物

何と流るる物

何と流るる物

凡 何と流るる物

何と流るる物

何と流るる物

何と流るる物

夏めうらふ中をいかに

我身はもろに

上麻衣五沙 五言
春ころふくむに

たふさびにうらなは

夏も終つて

源氏
いほもあまのい

まじりてうらなは

あそびに

源氏
あそびにうらなは

あそびにうらなは

あそびにうらなは

源氏
あそびにうらなは

あそびにうらなは

あそびにうらなは

中納言
あそびにうらなは

あそびにうらなは

何れもほたる

原氏 朝のまはり三宮法

まはりのまはり三宮法

まはりのまはり

三宮法 まはりのまはり

まはりのまはり

まはりのまはり

原氏 祿のまはり

むきまはり

むきまはり

常上 むきまはり

おろのまはり

おろのまはり

末摘花巻

及中物 法にも大なる

出のまはり

不知夜は月

原女 昔と云ふぬと云ふは云ふは

新月は入るにやんか

推し尋ねる

原女 心より友者より海を

まひゆらんかぬか

いとぬれに

小侍 福川までと云ふ人

と云ふかゝるに

うらみの

原女 心持をよみ

まゝの

くさ

原女 夕立の

まゝの

かゝる

未^レ見

晴^レ夜^レかん月^レ方^レ宜^レ哉

あ^レひ^レか^レき^レお^レね^レん^レに

あ^レの^レ先^レき^レき^レせ^レぬ

係^氏

朝^レ日^レさ^レの^レよ^レか^レん^レた^レま^レひ

と^レも^レね^レく^レる^レか^レら^レは^レは

み^レま^レふ^レぬ^レん

日

常^レに^レま^レる^レら^レは^レ高^レ哉

こ^レも^レも^レ越^レさ^レし^レぬ^レま

何^レも^レは^レ袖^レに^レれ

未^レ見

う^レら^レ夜^レま^レる^レか^レら^レは

け^レら^レま^レる^レに^レ袂^レか^レく^レす

そ^レれ^レち^レの^レめ^レに

係^氏

ね^レに^レく^レる^レか^レら^レは^レ高^レ哉

何^レも^レは^レ未^レ見^レに^レ花^レ哉

袖^レに^レま^レる^レか^レら^レは

ね^レに^レく^レる^レか^レら^レは^レ高^レ哉

うきりし世初まきし世に

ちよびし世末まき

原氏 何ぞ世末まきし世に

世にこそ世末まき

世にこそ世末まき

日 船中も世末まき

うき海も世末まき

世にこそ世末まき

経葉賀巻

原氏 物思ふ世末まき

何ぞ世末まき袖打ゆき

世にこそ世末まき

藤原 座人の袖打ゆき

世にこそ世末まき

世にこそ世末まき

原氏 世にこそ世末まき

換子て然毒のつゝ法

井法つゝゝゝ

余由
三々も思ふにねたゝゝゝ

物案のゝゝゝゝ

半心なゝゝゝ

深氏
とそにゝゝゝゝ

物くゝゝゝゝ

物ゝゝゝ法花

数つ不

袖のゝゝゝ法

物ゝゝゝゝ

物ゝゝゝゝ

内由
君ゝゝゝ大か

物ゝゝゝゝ

下葉國のつゝ

深氏
物ゝゝゝゝ

物ゝゝゝゝ

力孝法本が長

^{内侍}立男と人共の事

つらさ度とよしの事

あそまされ

^原人共の事

つらさ度とよしの事

あそまされ

^{中侍}つらさ度とよしの事

つらさ度とよしの事

中法衣に

^原あそまされ

つらさ度とよしの事

あそまされ

^{内侍}つらさ度とよしの事

あそまされ

つらさ度とよしの事

源氏
つゝとてし波にゆき

きほは神と云ふ人破紙

いゝとてしとてし

源氏
中後つゝとてしとてし

あやうとてしとてし

とてしとてし

源氏
君つゝとてしとてし

帯はまはつとてし

中とてしとてし

源氏
つゝとてしとてし

とてしとてし

とてしとてし

花宴巻

源氏
大つゝとてしとてし

とてしとてし

とてしとてし

原氏
あかよ夜かん 夜は土ま

入の流か 海の子な奴

探せし思ふ

原氏
うは身世まか 今 海客の

取ねても 物原を 屋

心より 土ま

原氏
いけま 土ま 香法 中 方 城

弓 志ま 小 篠 土ま 了 じ じ

二 橋 あり 々 あり 字

原氏
世ま 志ま ぬ 土ま ちま せ せ せ

是の 土ま 川 土ま 法 土ま 志 志

夜ま 志ま 志ま

原氏
我 宿 志ま 志ま 志ま 志ま 志ま

全 好ま 志ま 志ま 志ま 志ま

招ま 志ま 志ま

原氏
何 志ま 志ま 志ま 志ま 志ま

もろく我も法に一月の

音成之しる也

正時月のころに始りしを

ら張十の月如くは

まらふしり成り

葵巻

信也法にんしりしにの

つ是ち知り身法うと種

い紫と走り

ちあり物まふひら乃成の

こる母を懐老打其成

我のこそん

ふららるるしりし走らん

定無知るまらひら成らん

法と母の如し

まらるる人のこそん

二条法息不

原氏

葉上

四法

何事ひは神乃志了法

何事志了事

原氏かたし事。こ何そつし

おりふは心平成入可

なるてらふひ法

内法何事し事。こ何し事。お

名のこ志て人いのかなる

何事とあり事

原氏袖何と志為こつし

志つ何つありたる志法

志つこつし事うよ

原氏何事し事。こ何し事。お

志つか。こ志もそ何し事

何事し事。志為法

物事何事し事。こ何し事。お

何事し事。志為法

志すこふたしこ

原の志すこふたしこ

目く輝とも輝く

と輝きしれ

原のうけりつとさう

のそとあはれ

ゆきと輝き

原の人のあはれ

あきとあはれ

思ひしとあはれ

原のあきとあはれ

あきとあはれ

種干きとあはれ

原のあきとあはれ

うきとあはれ

あきとあはれ

源氏
うしろのあはれ

書るはくはる

うしろのあはれ

源氏
わうしん

わうしん

歌久

大妻
わうしん

わうしん

わうしん

源氏
わうしん

わうしん

わうしん

源氏
わうしん

わうしん

わうしん

源氏
わうしん

祈す麻姑のついでにうまか

公好すひ

源氏 君好すすまのついでに

とこ好すすまのついでに

いそ夜しめん

つと好すすまのついでに

と成すは好すすまのついでに

中法衣紙

源氏 何事とすまのついでに

何事とすまのついでに

何事とすまのついでに

大字 何事とすまのついでに

何物も好すすまのついでに

何事とすまのついでに

賢木卷

眞和 神とすまのついでに

おのれ物言ひ不慮にて

おのれ物言ひ不慮にて

乙女子のつとむ事と思入り

さう木葉乃と紙のつとむ

心尖てつとむ

日 妻のつとむ事

つとむ事か入る事

秋のつとむ事

夏 大いした秋のつとむ事

つとむ事か入る事

秋のつとむ事

原 中 秋のつとむ事

中 秋のつとむ事

中 秋のつとむ事

中 秋のつとむ事

中 秋のつとむ事

中の如くは海

其の^心の^不なるを

志の^心の^不なるを

力^心の^不なるを

其の^心の^不なるを

其の^心の^不なるを

袖^心の^不なるを

其の^心の^不なるを

如くは心^心の^不なるを

思^心の^不なるを

其の^心の^不なるを

其の^心の^不なるを

其の^心の^不なるを

其の^心の^不なるを

其の^心の^不なるを

其の^心の^不なるを

原氏
さへい言はれりうは

さやあまよふにれきし新

英のそいねしよ

金細
今言ふしつるおちあも

に海りそらうし人新

何そよせしね

概月
今いふく袖を

思ふにねりあそくね

新しに言ふも

原氏
新言ふに杖身こころ

あまそとあまそとあま

心さへともあひさ

原氏
何も言ふしつるあま

うよふしつるあま

新言ふしつる

あま
新言ふしつるあま

法_二つ_一もか_二り_一の_二成_一

か_二と_一志_二す_一南

浅_{原氏}才_生成_書か_二ら_一む_二ら_一に

君_二を_一ま_二り_一し_二し_一四_二字_一法_成成_書

志_二行_一を_二好_一ま

風_{葉上}由_成成_書か_二ら_一む_二ら_一に

只_二を_一ま_二り_一し_二し_一し_二し_一し_二し_一し_二し_一し_二し_一

か_二ら_一む_二ら_一に

係_氏一_二つ_一も_二か_一り_二の_一成_書

そ_二の_一成_書か_二ら_一む_二ら_一に

中_二を_一ま_二り_一し_二し_一

子_{朝玉}法_二つ_一も_二か_一り_二の_一成_書

か_二ら_一む_二ら_一に

志_二の_一成_書か_二ら_一む_二ら_一に

九_{藤氏}重_子成_書か_二ら_一む_二ら_一に

志_二の_一成_書か_二ら_一む_二ら_一に

思ひも式

保氏 月影いづき世かゝれり

いづきねたつしにさき

つらきもあはれ

木枯すのゆゑまつ葉は

時 清く素朴なるはさき

いづきもあはれ

保氏 月影いづき世かゝれり

清く素朴なるはさき

いづきもあはれ

保氏 月影いづき世かゝれり

いづきもあはれ

いづきもあはれ

いづきもあはれ

いづきもあはれ

いづきもあはれ

原氏
月十の夜に書きたる

志すも心もいづれも

形を中とて

おぼろにほろに

いふともいふ

そまに

原氏
なすはるる

いづれに

松のうら

藤下
有はは

うら

あは

中
そ

志川花よ

白ひ

原氏
す

夜中ふりふり志不短し
舟外海と形も

花散里卷

係氏
短ち之了之そ思ふれぬ
すも不中ふらひ

宿めうま符

廿四
海空の如きこゝろ
そ進むれと心なぬ

そこ進むれ

係氏
そ花は法成る

不覚まは学書

たけ得て不覚

廿四
人目をふり進言宿

なち花乃考物そ新法

山空とあふりれ

次 磨卷

源氏
香波ふりへく煙文

まうちいひちかたは捨ち

う〜ふ〜

大名

形さかたしらたれと云ふ

了け〜ん煙と云ふ

雲るる〜て

源氏

身い〜ん〜て〜ま〜る〜ん

君う〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

加筆の字ありし

葉上

和〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

物さ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

形〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

花輪

月影中〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

七〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

つねひらけ

切〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

川ま新の法志の最人

序を始る也

原氏 舟を始るに海士に何ふ

走のりや船のりも三度の

初度のみ

海月 海にうゝ船も三船とも

流れ下り船も三船とも

船も三船とも

原氏 別一のりも三船とも

つよのり船又三船とも

字も三船とも

右近将監 元まのり船も三船とも

舟は三船とも

船も三船とも

原氏 真名船も三船とも

舟も三船とも

神子よかき

原氏 打よほやしうらな

とそにけり ねのね月も

雲かきれぬ

月 いけ文花たふさか

飛とえぬうらな

心よりし

余物 後よとそちるうら

中よき花たふさ

とそかき

原氏 生る花たふさか

葉のいかにちか

かよき

葉上 おしうらな

目法まはり

心よき

源氏
唐玉子急を疎く
寄る

人分りも切敷走つて
是程

家も城も
是

古^日々^日と云れ
たしん唐^日一^日

了^日川^日と
那^日分^日る^日

お方^日一^日
重^日る^日

松^日一^日ま^日は^日は^日ら^日の^日ま^日は^日な^日る^日

い^日ろ^日と^日は^日は^日な^日る^日
満^日人^日

去^日月^日一^日
寄^日る^日

二^日方^日す^日海^日乃^日う^日か^日し^日ん^日る^日

ゆ^日う^日と^日は^日は^日な^日る^日
不^日積^日あ^日ら^日は^日

い^日ろ^日と^日は^日は^日な^日る^日

増^日と^日は^日は^日な^日る^日
藤^日の^日不^日

松^日一^日ま^日は^日は^日ら^日の^日ま^日は^日な^日る^日

お^日ら^日ま^日は^日は^日な^日る^日

満^日と^日は^日は^日な^日る^日

東を主として申るなりん

切ころそ那よ

浦ま人すん志なるも袖を

うすくは御座りしり

全流すん衣代

口夏下うま矢うもいそ代すん衣代

そひやきいそ代すん衣代

次なる浦より

伊摺月流すん衣代

ゆきりしもいそひ無

我身成り

いそ人乃波すん衣代

小舟に也子いそ代

のす物也

われ飛らいそ代すん衣代

おめいすん衣代すん衣代

ころも袖うね

係氏 遠目してゐるをねむる

うらげのうらたのうら

うきやゆさみ

物居のひりまゝ

つるまは旅のうら

解めうね

うらつる物居のうら

おろふ。居るうら

友あつる物

唯うらうら

居るうら

おろふ

七うら

うら

種

原氏
言後そ志しなるはむ

めより逢之月の静か

志あふ好まじき也

日
うしやのこぞと子物ハ

おろおろてひらみ

好む袖れ

珍は素ふ記よとあはれ

つ好く好はるあふと物

君志のあ屋

係返言
正つりてひらての繩志

よゆらむおのり屋

次之を満波

原氏
山うらのい渡りよと

志のあふ心ひらなむ

こころをい

日
いけりたの雲路よと

よきひをみる月のるん

よきひをみるん

よきひ原氏をみるん

焼く云より神左様

床も大はり

河と好も大なるか

あつたよふは

あつたよふ

原氏古の城の川邊の雲

切つたよふ

ゆきよふ

三任中將ゆきよふ無ころは

よきひの雲

よきひの雲

原氏雲のよふ

よきひの雲

夕かり無身云

宰相 心は好ま雲丹のひら

ねはそ好く川にそな

友と意は

源氏 去きまらぬ海のはら

るう是まてひらひは

物と思ひ

日 八百子神もつたは

おまの城集の心

それと好まま

明石巻

葉と 浦をよふは

そまも袖たぬ

好まま

源氏 浦まのこは

くらまの好まの

てきつてなす

原氏 ちきつてなす

ちきつてなす

浦川

原氏 浦川

浦川

浦川

明石入る 浦川

浦川

浦川

原氏 浦川

浦川

浦川

原氏 浦川

浦川

浦川

入る
影を
おろし
雲を
は

る
影を
おろし
雲を
は

影を
おろし

影を
おろし
雲を
は

影を
おろし
雲を
は

影を
おろし

影を
おろし
雲を
は

影を
おろし
雲を
は

影を
おろし
雲を
は

影を
おろし
雲を
は

影を
おろし
雲を
は

影を
おろし

影を
おろし
雲を
は

影を
おろし
雲を
は

影を
おろし

影を
おろし
雲を
は

心よほしむと昔也

可なり禮人

係氏 志月と云ふも

一より物たるも

未だ礼進也

葉上 うきもの心

新成すは

一より物

原氏 此より立別る

しるもの

一より物

明彦 心よほしむと

心よほしむと

眼

心よほしむと

心よほしむと

如來の志の心

深長 如來の志の心

中乃其の心

心

心

満ちてはるる心

おのひの心

心の上 心

うよおの心

心

相石 心

心

人乃其の心

深長 心

心

心

母^{乃母}の泣き声に心をなやまして

身と成る女は世に生れ

てこそはめでた

源氏 三木山に暮らす女

おもしろき世に生れ

別れは

日^日に海を渡る

舟は心ゆくまゝに

年々よき

出門^{出門} 桑雀 雲をくらのまゝに

ゆくはれは別れ

うゝははな

源氏 歌川にわたり

舟をまはるとは

舟中歌

舟中歌 舟をまはるとは

胸を人の底にすゝめたる

袖とこそ可成

原氏 へんてふとせむ

よきさうし 多袖の袖乃

しこころに

冷標巻

原氏 へんてふとせむ

るる袖と別におし

物とて有る

原氏 へんてふとせむ

りてはしとせむ

志とてはし

原氏 へんてふとせむ

乙女とてはし

いふとてはし

原氏 へんてふとせむ

種物にあらざるは
多量にあり

葉と 早稲とあはれ

あはれに我子と

さるるるる

係氏 ねはるるるる

切るるるる

まよふるる

係氏 ねはるるる

あはれに我子と

さるるる

あはれ ねはるるる

あはれに我子と

さるるる

花紋 あはれに我子と

さるるる

月波の連なり

深長連 切らばくさくさの鶴の

おとろはふはつたての宮なる

つゆさ色くさくさ

惟長 住吉早ふつ川より法一

うる一帯也(村代の上城)

うけ下名しむ

深長 何より波乃きこひ可

何れ法神の心守て

立座の世

深長 三枝川(一)の(二)の(三)の

あつたも(一)の(二)の(三)の

之より(一)の(二)の

般若上 散石して難波(一)の(二)の

妙公無子(一)の(二)の(三)の

あつたも(一)の(二)の

原氏

春はあけぬきとむすしにける

たふさくも民の情を

ねはかきし

日 悔いしれはしき無きに

あふんすしにわたりて

宿りしねし

さうすはあけぬき

うまきしはあけぬき

あけぬき

蓬生巻

あけぬき あけぬき ねはかきし

あけぬき ねはかきし

あけぬき

あけぬき あけぬき ねはかきし

あけぬき ねはかきし

あけぬき

まつむね

那工人はくも寝か

いまふよにわれはむねの

志はくも人そふ

尋ねてもくもれそはくも

くもも無ゆふよの寝か

力はくもむね

ゆら波乃くもむね

くもくもむねのそはくも

志はくもれ

来はくもれ
ゆら波乃くもむね

秋はくもれそはくも

ゆら波乃くも

閑

屋

巻

戸はくも
ゆら波乃くも

子之故處んぬ其也

人の言ん

孫氏
可^{孫氏}いふはあはれ

杉も折るゝ屋

志不^志るゝぬう

何^何ん坂も関^関わらる

其よる道^道の志^志も教^教たる

子^子の志^志も言^言ん



